



モスクワのボリショイ劇場



コンクール期間中だけ飾られているバレリーナのオブジェ

第4回 「徳山あすかのロシア生活」

モスクワ国際バレエコンクール、日本勢が大活躍

6月25日からスタートしていた第15回モスクワ国際バレエコンクールが、7月5日に閉幕しました。

1969年に創設されたこのコンクールは、世界三大バレエコンクールのひとつ。今年は35カ国から362件の応募が寄せられ、動画審査を経て30カ国の158名が参加資格を得ました。このコンクールが行われるのは4年に1回。前回、2022年6月に行われた第14回コンクールでは、政治情勢のため参加を見送った人も多く、21カ国から112名のみのエントリーでしたから、今回はだいぶ増えたことになります。

モスクワ国際コンクールに参加するとボリショイ劇場の舞台上で踊ることができるので、それだけでも若いダンサーにとっては特別な体験です。入賞しなくても、自分をアピールできれば、ロシアのバレエ団における採用のチャンスも広がります。また、すでにバレエ団に所属している若手ダンサーにとっては、あらためて実力をアピールし、昇格や新しい役へのチャンスを掴む機会となります。

審査はジュニア部門（19歳以下）とシニア部門（27歳以下）の2つのカテゴリーで行われ、さらに1人で踊るソロと、男女ペアで踊るデュエットに分かれています。日本からは10人が参加し、素晴らしい成績を残しました。

男性ソロ部門でゴールドメダル

コンクールが始まる前から、きっと一位を取るだろうと予想していたダンサーが、やはり取ってくれました。20歳のグジェレフ瞭舞（りょうま）さんが、シニアの男性ソロ部門で

一位となり、金賞を獲得したのです。東京都三鷹市出身で、ベラルーシ人の父と日本人の母の間に生まれたグジェレフさんは、日本国籍を選び日本代表としてコンクールに出場しました。

グジェレフさんは、昨年ロシアの名門マリインスキー・バレエに入団し、



異例の速さで様々な大役に抜擢されています。現在の階級はセカンド・ソリストですが、プリマ・バレリーナを相手に主役も務めており、バレエ団からもかなり期待されていることがよくわかります。

グジェレフ瞭舞さん コンクールのガラコンサートより

私がグジェレフさんの踊りを初めて生で観たのは、昨年12月のマリインスキー・バレエの公演「くるみ割り人形」でした。今年1月に発行されたJICインフォメーション237号のコラムで、サンクトペテルブルクに弾丸旅行し、ファースト・

ソリストである永久メイさんの舞台を見に行った話を書かせてもらいましたが、その時の永久さんの相手役で、王子を踊ったのがグジェレフさんだったのです。ロシアの歴史ある名門マリインスキーの舞台で、日本人2人が主役を務めたということは、私にとって胸の熱くなる出来事でした。

表彰式でグジェレフさんに賞状とメダルを渡したプレゼンターは、コンクールの審査委員長であるスヴェトラナ・ザハロワでした。ザハロワといえばロシアの人民功労芸術家で、ボリショイ・バレエのプリマバレリーナ。ロシアバレエ界を代表する存在です。この2人のツーショットも、バレエファンにとっては感動の瞬間でした。



グジェレフ瞭舞さんとザハロワ審査委員長

そしてグジェレフさんの幼なじみで、2歳年下の渡部出日寿（デニス）さんは、ジュニア部門ソロの男性二位となり、銀賞獲得という快挙でした。渡部さんの両親もベラルーシ人男性と日本人女性で、三鷹市出身です。仲良しで共通点も多い2人が、揃って入賞したのです。渡部さんが踊った「くるみ割り人形」の踊りを見て、普通ならば表情が硬くなってしまうような回転前の一瞬に笑顔を見せるなど、ずいぶん舞台度胸がある人だと思いました。そして回転そのものも、綺麗に決めていました。

さらには、ジュニア部門ソロの女性三位に、名古屋出身の永井咲良さんが選ばれました。永井さんは回転が得意なタイプのダンサーで、「騎兵隊の休日」バリエーションでは可憐な演技を披露しました。



表彰式の渡部出日寿さん



永井咲良さん「騎兵隊の休日」より

指導者の勝利？

今回、影の優勝者とも言えるのは、レオニード・サラファールノフでしょう。ウクライナ出身のサラファールノフは、マリインスキー・バレエのプリンシパルを長く務め、現在ではヤコブソン・バレエやマリインスキー・バレエで若手の指導にあたっています。今回、サラファールノフが各劇場で指導したメンバーが軒並み入賞しており、グジェレフさんもそのひとりです。サラファールノフといえば超絶テクニックの持ち主で、日本にファンも多く、自身もモスクワ国際バレエコンクールで金賞を取っています。指導者としてのサラファールノフは、ダンサーの音楽性や芸術性を伸ばすことに定評があります。コンクールでの教え子の勝因は、彼の目指したテクニックと芸術性の融合にあると思います。技術だけ高くてもロシアでは賞につながらないということを、誰よりもよく知っているのでしょう。

中国系アメリカ人に大注目

ジュニア部門ソロの女性で金賞を獲得したのは、中国系アメリカ人のクリスタル・ファン。彼女も、コンクールが始まる前から非常に注目されていたダンサーでした。というのはこれまでにローザンヌやユースアメリカグランプリといった、世界レベルのコンクールで入賞しており、非常に優れたテクニックの持ち主だからです。特にコンテンポラリーには定評があります。その彼女が、保守的・古典的なロシアバレエ界でどのように受け止められるのかというのが注目ポイントでした。結果は堂々の一位。技術だけでなく表現力、舞台での

存在感は他の参加者とは一線を画しており、バレエスタイルの違いを超えて高く評価されました。演技とバレエの技術を結びつけるのは本当に難しいことなのですが、クリスタル・ファンはそれを自然な形でやってみせました。まだ、サンフランシスコバレエスクールの生徒である彼女、卒業時には世界のバレエ団が獲得に動き出すでしょう。

個人的に驚いたのは表彰式でした。他のジュニアのダンサーは、舞台上では堂々としていても、表彰式では「素の自分」となり、緊張したりオドオドするのが普通です。しかしクリスタル・ファンは、まるで大女優のように自信を持って振る舞い、17 歳とは思えない貫禄でした。一瞬の弱さも見せない彼女、メンタルの強さの違いを見せつけました。



クリスタル・ファン

ロシア勢、まさかの金賞なし

ここまで読んでくれた方は、ロシアのコンクールなのに全然ロシア人の名前が出てこないじゃないかと気づいているかもしれません。そう、今年は、ロシア人が金賞を取った部門がひとつも無かったという、実に異例の年となりました。しかもロシアだけでなく、旧ソ連諸国まで含めても、誰も一位を取れなかったのです。これはモスクワ国際バレエコンクール始まって以来の出来事です。

ロシア紙「コメルサント」は、モスクワ国際コンクールは長年、「自国びいき」の大会という評判を背負ってきたと指摘しています。というのは第 1 回大会で、当時高く評価されていたアメリカのダンサー、エヴァ・エヴドキモワが第 3 次審査に進めなかった、ということがありました。当時の審査委員長ガリーナ・ウラノワは、上層部から押し付けられたこの決定に抗議し、それ以降、二度と審査員を務めることはなかったのです。とすると、今回のザハロワをはじめとした審査団は、アメリカ人だろうとロシア人だろうと、自分たちの基準に沿って厳格に審査した、と言えるかもしれません。

また、コメルサントは、「ロシアの劇場はもはや、看板ダンサーを舞台から外してまで大会へ送り出す必要はない」とも指摘しています。確かに、モスクワやサンクトペテルブルクの劇場でバリバリ踊っているベテランのシニアの参加はほ

ぼなく、むしろジュニア部門で、学生や入団 1 年目の若手たちが、将来への足掛かりとして積極的に参加していました。



今回のコンクールは、世界のバレエ界の新しい潮流が示されていたように思います。超絶技巧よりも、美しさや軽やかさ、エレガンスさ、バレエを構成するそれぞれの要素をいかに丁寧にこなすかということに、重きがおかれていました。それでこそ、このコンクールをロシアでやる意味があったと思います。

夏の間、しばらく劇場はお休みにになり、ダンサーは帰省や休暇で散り散りになります。ほかの国の舞台にゲスト出演する人も多くいます。今夏はロシアバレエのスターの来日が目白押しですから、かなり公演の当たり年と言えるでしょう。また、9 月からの新シーズン、ロシアを訪れる方はぜひ、各地のオペラバレエ劇場で、本場のバレエを楽しんでもらいたいと思います。



徳山あすか／モスクワ在住ジャーナリスト

略歴；早稲田大学第一文学部卒業。時事通信社に入社。2013 年同社を退社しロシアへ。サンクトペテルブルグ工科大学、モスクワ教育大学修士課程を経て、2015 年ロシア国营通信社「Rossiya Segodnya」に入社し同社の外国読者向けメディア「Sputnik」日本語版の記者として活躍。2026 年同社を退社。現在フリー・ジャーナリスト。